

令和 3 年度版 NEW CROWN Q&A

目次

全体

2

- Q. 教科書の編修方針は？
- Q. どのような力を育成する教科書ですか？
- Q. 教科書のレッスンはどのような構成ですか？
- Q. 新学習指導要領で学習内容が増えていますが，教科書はどのようにになっていますか？

小中連携

4

- Q. 令和 2 年度から小学校で英語が教科化されます。中 1 の教科書はどのように変わりますか？
- Q. 中 1 の教科書で扱う文法事項は？

言語活動

5

- Q. 改訂された USE Read の活動は？
- Q. 改訂された USE Write の活動は？
- Q. 改訂された USE Speak と新設の Take Action! Talk の活動の違いは？
- Q. Take Action! Listen のリスニングの音声と，巻末のスキットの使い方は？
- Q. GET Plus を新設した意図，役割は？
- Q. Project の目的は？

語彙

8

- Q. 語彙の選定と，発信語彙と受容語彙の扱いはどのようにになっていますか？

ユニバーサルデザイン等

8

- Q. ユニバーサルデザインと学習の配慮は？

Q. 教科書の編修方針は？

以下の５つの基本方針に基づいて編修しました。

- ① 小学校での学びを生かして、中学校での学びにスムーズに接続する。
— 小学校英語の教科化に伴う小学校での体験をふまえ、円滑に中学校での学びへとつなぐレッスン構成
- ② 基礎的・基本的な知識・技能を習得し、思考力・判断力・表現力を育成する。
— 言語材料を身につける GET と、それらを活用して言語活動に取り組む USE を配置したレッスン構成
- ③ ５領域のバランスに配慮し、対話的な学びや深い学びを引き出す言語活動を充実させる。
— 小学校英語の教科化と、中学校英語で取り扱う言語材料の増加に対応し、高度化された言語活動
- ④ 生徒の知的欲求にこたえる題材、人間教育に資する題材を選定する。
— 生徒の知的好奇心や興味・関心、発達段階に合った題材やテーマ、多様な文化などに触れる題材
- ⑤ 生徒の主体的な学びを支援し、学びに向かう力を育てる資料の充実をはかる。
— 自律的な学習をサポートする資料や QR コード、CAN-DO リストなどを配置② ５領域のチカラを総合的、統合的に伸ばしていけるレッスン構成

Q. どのような力を育成する教科書ですか？

英語教育を通して、確かな学力、国際社会に対応できる資質・能力と、豊かな人間性を、それぞれの学校段階に応じて育成することを教育理念とし、それを実現するための目標として、以下の４つの力を育成することを目指しました。

- ① ことばを使う力を育てる
— ことばを使うことは、思いを伝えること。ことばを使って理解し、表現し、伝え合いながら、実際のコミュニケーションで活用できる確かな英語力を育成します。
- ② 他（人や文化など）とかわる力を育てる
— かわることは、互いを認め合うこと。さまざまな人や文化などに触れながら、社会の多様性を理解しかかわっていく力と、豊かな心を育成します。
- ③ 考える力を育てる
— 考えることは、自分と向き合うこと。さまざまな活動を通して、目的や場面、状況に応じてコミュニケーションを図る力と、論理的・批判的に考える力を育成します。
- ④ 学びに向かう力を育てる
— 学ぶことは、自分の可能性を広げること。多様な学び方を経験しながら、学ぶことを楽しむ心と、主体的・協働的に学ぶ力を育成します。

Q. 教科書のレッスンはどのような構成ですか？

レッスンには、言語材料を身につける GET と、それらを活用して言語活動に取り組む USE を配置しています。GET では、文法事項や文構造、語句・表現などの基礎的・基本的な知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの活動を通して、活用できる技能を身につけます。USE では、知識・技能を活用して、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動に取り組み、思考・判断・表現する力を身につけます。

レッスン全体では、学びのプロセスを「見える化」し、学習の流れがわかりやすい構成になっております。

- ① とびら ー学習の見通しを立てます。
- ② GET ー文法事項や、語句・表現など基礎的・基本的な知識とそれらを活用できる技能を確実に習得します。
- ③ USE Read ー知識・技能を活用して読む活動に取り組み、目的や場面、状況に応じて概要や要点を捉える力を養います。
- ④ USE Speak / Write ー知識・技能を活用して話す／書く活動に取り組み、目的や場面、状況に応じて思考・判断し、表現する力を養います。
- ⑤ 文法のまとめ ー学習した文、文構造、文法事項を振り返ります。

Q. 新学習指導要領で学習内容が増えていますが、教科書はどのようになっていますか？

令和 3 年度版では以下の理由で、全体の分量が増えています。

- ① 新学習指導要領で小学校英語が教科となり、他の教科と同様に、中学入学時には基礎的な知識・技能（アルファベットの文字、簡単な語句・表現、文や文構造）を身につけています。

＝小学校で学ぶ内容＝

授業時数：3・4 年＝各 35 時間、5・6 年＝各 70 時間 合計 210 時間

語彙：600～700 語／文、文構造：be 動詞、一般動詞、can、動詞の過去形など

- ② 新学習指導要領では、中学で扱うべき語彙が増え、新しい文法事項が高校から移動してきています。
語彙 1,200 語程度→1,600～1,800 語／新規文法：現在完了進行形、仮定法過去、原形不定詞など
- ③ 新学習指導要領では、5 つの領域の目標と言語活動の例が具体的に示されました。また、それぞれの言語活動については、これまで以上の充実と高度化がもてられています。

・学習指導要領の「(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項」に提示された 20 の言語活動例を網羅
聞くこと (ア)(イ)(ウ)(エ)／読むこと (ア)(イ)(ウ)(エ)／話すこと [やり取り] (ア)(イ)(ウ)／
話すこと [発表] (ア)(イ)(ウ)／書くこと (ア)(イ)(ウ)(エ)

特に言及するとすれば、「話すこと [やり取り] (ウ) 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき、読み取ったことや感じたこと、考えたことなどを伝えた上で、相手からの質問に対して適切に応答したり、自ら質問し返したりする活動」を、令和 3 年度版の目標と位置づけ、2 年 Project 3 と 3 年 Project 3 にディスカッションの活動を配置しています。

分量は増えておりますが、本文の英文のレベルは平成 28 年版（現行版）と同程度と考えています。USE Speak / Write, Project などの言語活動においても、めざす英文のレベルは同様ですが、そこに至るまでのプロセスをスモールステップで提示して、取り組みやすくなっています。

Q. 令和２年度から小学校で英語が教科化されます。中１の教科書はどのように変わりますか？

１年冒頭に Hello, Everyone!, Starter 1-3, Lesson 1-3 を設け、以下のように小学校の学びをふり返りながら、中学校の学びへとスムーズ接続できるようになっています。

Hello, Everyone!, Starter 1-3

- ・ことばの使用場面と語句・表現
- ・アルファベットの文字と、文字の読み方
- ・身近なことについての会話

Lesson 1-3

- ① 聞いたり、話したりした英文を取り出して文字で確認します。
- ② 取り出した英文の類似点や相違点を考えルールに気づかせます。
- ③ ルールを意識しながら練習し、知識・技能の定着を図ります。
- ④ 知識・技能を活用し、初見の英文を読む、まとまりのある英文を書きます。

Q. 中１の教科書で扱う文法事項は？

Lesson 1 で be 動詞と一般動詞を学びます。従来この両者を一度に扱うことは、生徒の混乱を招く恐れがあるため、「避けるべきこと」とされてきました。しかし、210 時間という小学校の学びで頻繁にこの両事項を使用してきたことを考えれば、従来の中１とは学習経験も身につけた知識・技能も異なります。I am ... / I play ... / I have ... などがチャンクとなって身につけていけば、I am play ... というような混乱は生じないかもしれません。むしろ、小学校外国語の利点を活かし、両事項をまとめて扱うことができます。

小学校外国語をふり返りながら、改めて比較したり、明示的に整理したりしていくことで、時間的余裕を確保しつつ、過去→現在→未来の時制を１年で学び、２、３年での学習へと進め、中学で新しく取り扱うことになった文法事項をていねいに指導することができます。

Q. 改訂された USE Read の活動は？

【改訂のポイントと授業イメージ】

GET では、ターゲットの文法事項を含む 40～50 語程度の短い文を読みますが、USE Read では、1 年 100 語、2 年 200 語、3 年 300 語のまとまりのある長文を読みます。

令和 3 年度版の USE Read は、新学習指導要領に示された、「目的や場面、状況に応じて読む言語活動を通して、思考力、判断力、表現力を育成する」場であるため、漠然と英文を読むのではなく、「どんな場面や状況で」また「どんな目的で」英文を読むのか、という読みに入る前の設定をきちんとし、SETTING に示しました。

また、タスク構成も、STAGE 1 → 2 → 3 と進んでいき、1 では読みに入る前に、読むテキストに関連して既に持っている知識（内容スキーマ）を活性化し、読みに取り組みやすくなるようにしてあります。次に 2 では、Guide と Goal と分かれており、Goal が英文の読みの最終到達点になっています。そのため、まず Goal に取り組んでみて、もし少し難しいようであれば、Guide をヒントとして使いながら Goal のタスクを完成させていくという学習の流れを想定しています。最後に 3 は、読んだ後の活動として、読んだことを元に、自分の考えや意見を表現する活動を置いています。これは、学習指導要領の話すことや書くことの最もレベルの高い目標である、読む→話す〔書く〕という領域統合的な活動のミニ版で、最終的には、Project に設定されているような大きな統合的な活動への橋渡しとなっています。

【ジャンルやテキストタイプの違いによるタスクの違い】

平成 28 年度版（現行版）と同様に、令和 3 年度版でも、「物語文」「説明文」「意見文」の 3 つのテキストタイプのラベルをつけています。物語文であれば、時間の流れや登場人物の動きなどを追いながら、物語全体の概要を捉えるタスクが、説明文であれば、トピックは何か、段落構成はどうなっているかなどを考えながら概要や要点を捉えるタスク、意見文であれば、話者や筆者が言いたいことは何か、その理由は何かなど、要点を捉えるタスクを置いてあります。

【学習の配慮】

- ・ Words 欄の単語に意味を付け、未知語という読みの障害を取り除きました。
- ・ SETTING では、英文を読む目的を理解し、読むことへ動機付けます。
- ・ STAGE1 では、本文の内容に関して事前に知識を持たせることで、読んでみたら理解できたというような感覚をもたせ、読みのハードルを下げます。
- ・ Read では、本文を読んで Goal タスクに取り組むことが目的ですが、それが難しい場合は Guide に取り組むことで、Goal の答えに一步步近づいていきます。

Q. 改訂された USE Write の活動は？

USE Write の改善は主に次の 2 点です。

- ・ 1 つめは、上部の「設定の確認」です。これは、「目的や場面、状況に応じて」、聞いたり、読んだり、話したり、書いたりする言語活動を通して、思考力、判断力、表現力を育成するという新学習指導要領の文言から来ています。すなわち、覚えるとか繰り返すというような機械的な練習でなく、どんな場面や状況で、何の目的であるのか、考えながら活動に取り組む必要があるということです。
- ・ 2 つめは、「花のひとりごと」「陸のひとりごと」の設置です。平成 28 年度版ではあるテーマで書くときの思考の流れを、メモの部分のみで見せていましたが、令和 3 年度版ではそこをさらに手厚くしました。Step1 から 2 へといくとき、どんなことを考えながら構成を考えればよいか、どういう視点で英文を書けばよいかを、書き手である花さん／陸さんの頭の中を公開して、生徒が書く活動に取り組むときの思考の流れを導いていけるように工夫しました。

Q. 改訂された USE Speak と新設の Take Action! Talk の活動の違いは？

【改訂された USE Speak】

USE Speak の改善は主に次の 2 点です。

- ・ 1 つめは、平成 28 年度版（現行版）の USE Speak では「やり取り」「発表」の両方を扱っていましたが、令和 3 年度版では、USE Speak ではほぼ発表のみ、やり取りは Take Action! Talk で扱うこととしました。
- ・ 発表を扱う USE Speak では、原稿書きの文は Write での経験を活かすことに任せて、発表に特化した活動の流れを提示しました。発表での音声的な留意点や、デリバリーの工夫などについて、考えられるようになっています。また、新学習指導要領にある「即興」の発表にも対応し、「サイコロトーク」「街頭インタビュー」などを扱っています。

【新設の Take Action! Talk】

Take Action! Talk は「やり取り」に特化したパートです。平成 28 年度版（現行版）の Let's Talk と見ためが似ていますが、内容的には平成 28 年度版の USE Speak 会話の拡充版です。文法的な観点は一切抜きにして、いろいろな表現やコミュニケーションストラテジー、言語の働きを学びながら、即興でやり取りする力をつけるためのパートです。

即興のやり取りを取り上げ、①身近なトピックについての自由な会話（チャット）、②決まった表現を使ったり、形式に則って会話を進める会話、③自分の意見を言ったり、相手の意見に反応したりする会話（ミニディスカッション）の 3 種類の会話活動を取り上げています。

Q. Take Action! Listen のリスニングの音声と、巻末のスキプトの使い方は？

学習用に作られた素材は、リスニングの音声であれば日常生活で耳にするものよりゆっくりはっきり読まれていたり、リーディングのテキストであればと簡易な文法や語句を使用して書かれていたりして、自然さを失ってしまいます。Take Action! Listen では、日常生活の中で実際に目や耳にする素材を使った、より現実の場面に近いオーセンティックなリスニングを取り入れることで、コミュニケーション能力を育てます。

巻末スキプトの使い方は、読んで答えを知ることでも、英文を読みこむことでもありません。英語を見ながら繰り返し音声を聞いて、発音してみて、英語の音変化や抑揚の特徴をとらえることで、リスニングの力をつけることが目標です。

Q. GET Plus を新設した意図、役割は？

新設した GET Plus では、場面とともに、会話の中で使われる文法のルールや語句のコンビネーションを学びます。ここでは、文法事項として POINT で手厚く取り上げるほどでもないものや、POINT で学んだ文法事項の知識を生かして十分に理解できる表現、すなわち、かたまりとして出会い、さっと使えるようになってほしい表現を取り扱っています。また、言語の働き（依頼する、許可を求める）を提示することで、表現の使用目的を理解した上で使えるようになることを目指しました。また、隣り合うページの Word Bank に示されている語句を使いながら練習をくり返し、実際のコミュニケーションで活用する力を養います。

Q. Project の目的は？

新学習指導要領でも、5 領域をバランスよく育成すること（総合）とともに、複数の領域を組み合わせる課題を達成する力も育成することを謳っています。令和 3 年度版では、5 領域の総合的な育成を USE Read, USE Write, USE Speak, Take Action! Listen, Take Action! Talk で、領域を統合的に活用する力の育成を Project が担う、という位置づけにしています。

Q. 語彙の選定と、発信語彙と受容語彙の扱いはどのようになっていますか？

令和3年度版では、以下の3つの基準で語彙を選択しています。

- ① CEFRJのA1・A2語彙をベースに中学卒業時までの2,200-2,500語を選定
- ② 発信語彙コーパスを掛け合わせ2,200-2,500語を発信語彙と受容語彙に分類
- ③ 『We Can!』(文部科学省), 『CROWN Jr.』(三省堂)などの小学校英語関連の語彙リストを掛け合わせ小学校英語と中学校英語の語彙に分類

教科書側注のWords欄には、中学での新出語彙を提示しています。

太字＝発信語彙 601語＝すべての中学生に表現の中で使えるようになってほしいもの

細字＝受容語彙＝表現の中で使えるまではいなくても見たり聞いたりしたときに意味がわかるもの

点線下＝受容語彙のうち話題語＝固有名詞やCEFR-JのC1,2ランクなどの語彙で、提示された意味を見てその場で英文の理解へとつなげられればよいもの

小学校で学んだ発信語彙281語については、必ず英文の中で扱った上、脚注に太字で提示しています。

なお、平成28年度版(現行版)と比べると、令和3年度版では、

総語数 7,600→9,200, 新語数 1,200→1,650, 最重要語 650→発信語彙 601+281 となっています。

Q. ユニバーサルデザインと学習の配慮は？

- ・色弱・色盲・色覚異常や発達障害の生徒にも、学習する内容が、どこに、どこまでの範囲で、どんな内容が書かれてあるのかがわかるように、色の選定や区切りを示すケイ線や囲みなどの工夫、見出しや活動内容などがわかるアイコン(記号やマーク)、そして活動内容を吟味して作成してあります。
- ・1年前半は「読む」文字と「書く」文字のギャップをできるだけ少なくした4線書体とUDフォントを使用しています。
※1年 Lesson 4以降及び2, 3年は、GETはNCゴシックで統一、Readはオーセンティックなテキスト(新聞や雑誌, Web, レポートなど)に合わせた書体、TalkとGET PlusはUDフォントを使用しています。
- ・2年, 3年になってもGETの本文は短いので、読みが苦手な生徒でも取り組みます。
- ・読みやすさと目の疲労の負担を軽減するために、ワイド版であっても、左右いっぱいに英文1を提示していません。
- ・USE WriteやUSE Speakなどの言語活動において、表現にいたるプロセスがスモールステップで示されています。
- ・USE Writeでは協同学習を取り入れ、助け合いながら表現活動ができるようにしています。
- ・USE Readにおいては、新出語に訳をつけてあります。